

共産主義者組織統一 準備委員会会報

№ 6

1966年7月15日発行

目 次

政治方針作成についての意見……………小 野 広… 1

方針案作成とわれわれの態度

— 堺氏の批判への反批判 — 柴 田 三 郎… 4

『反戦・平和斗争についての共産主義者の
共同行動推進のための会議』東京で開催…………… 6

— 投稿 —

代々木の転換とわれわれの立場……………西 条 浩 一… 8

発行所 共産主義者組織統一準備委員会

事務所：東京都新宿区四谷2の1 電話（353）8664
日本共産党（日本のこえ）内

政治方針作成についての意見

一九六六・七・五 小 野

広

I、政治方針作成についての基本的な方法、立場は第三回準備委の決定にすでにあたえられています、これを具体化するにあつて、次のような考え方が必要であると考えます。

(A) 国際情勢の評価にあたつては、何か既製の基準によつてスツキリとわりきり、何もかもわかつているという安易な態度をとらないこと。

「宣言・声明の基本的な正しさ」ということは、このふたつの文書の歴史的品格を考慮してはじめていえることであり、このなかにすでに現在の複雑な国際情勢への回答が既製の形で与えられているということにはならないと思います。たとへば、社会主義世界体制優位という声明の基本的命題も、「中ソ論争」以後統一した社会主義陣営としての力の発揮が困難になつていくという事情を考慮にいれなければ、そのままの形では樂觀的にあてはまらないことはあきらかです。（だからこそわれわれは社会主義諸国の共同行動を力説しているわけです。）

方針のなかでわれわれのなすべきことは、兄弟諸党の見解をも十分考慮にいれながら、われわれの能力をギリギリに使いこなし、今日の世界情勢の真のすがたを解きあかそうと努力することでしょう。そのなかで回答がにわかに出せない問題は、問題としてハツキリ提出しておくことが必要です。（問題を正しくとらえれば、それはなにか解決したことになる）。

このように言うのは、われわれが本物の知的、実践的努力によつて情勢全体をとらえようとするのが、それ自身、ひとつの政治的吸引力になるからであり、また逆にわれわれが何らかの弁護論に終始すれば、それは結集の事業から魅力と真剣さをうばう作用をすると考えられるからです。

(1)

(B) たしかにわれわれはいたずらに慎重さをかいた問題提起に走らぬよう注意する必要があります。それを前提にした上で、つぎのような全情勢に関連する問題点はぜひとも真剣にとりあげ、問題として提出する必要があると思います。

- (1) いわゆる「平和共存路線」の歴史的評価。
- (2) ベトナム戦争の位置づけ、アメリカの評価。
- (3) 民族解放運動と平和運動の関係の問題。
- (4) 社会主義的民主主義の一定の発展と世界革命運動（スターリン批判との関連で）
- (5) 世界経済の現状とそのなかの問題点。（帝国主義ブロック内の経済情勢、いわゆる南北問題）

これらはいづれも世界構造の問題にかかわる点であり、これらの検討のうえに、新しいインタナショナルイズムを強力に押しだすことが、政治方針にとつて不可欠だと思われる。

なお、そのためには、われわれの主体の側の問題として、

- (1) 国際情勢におけるソ連の役割と位置づけ。
- (2) 中国のそれ……とくに中国における現在の特殊な局面をどうみるか——を、できうるかぎり科学的に解明することが不可欠でしょう。代々木ルーミア路線は、これらの点をまつたく不問にふしていこうとしているとき、われわれこそがそれを正しくあきらかにすべきでしょう。

II、日本の情勢分析について

(A) (I)でのべた基本的考え方は日本の問題でもあてはまります。「歴史的転換点」の内容を独自にあきらかにすることがぜひとも必要です。

(B) そのうえに立つて、日本帝国主義の評価に関してはつぎのような考え方に立つことが必要だと思われる。すなわち、これまでの綱領論争の中心問題だったこの問題については、これまでの論争のすべての論点を一応歴史的に相対化して眺めなおすことが必要だということです。そのさい、いわゆる綱領主義的立場をも（すなわちこれまで

の論争の地盤そのものをも)批判的、自己批判的にみることが要求されていると思います。これができるならば、将来のわれわれの綱領のための道をひらくことができます。以下のような作業を提案したいと思います。

(1) これまでの綱領論争の問題点を、その間の情勢の発展につきあわせて検討すると。(代々木綱領の歴史的な性格をもふくめて)

(2) 大まかに、太い線で戦線情勢全体を総括し、そのなかで現在(=歴史的転換点)の持つ意味をあきらかにすること。

Ⅲ 闘争方針については、重点的に、かつ実践的に反戦平和運動、労働運動、青年運動の方針を定めること。これはこまかい、実行不可能なものではなく、① 現状の大まかな規定とそこからする大きい方向の明示、② きわめて具体的な(実行可能な)方針のふたつを中心とし、これからの実践のなかで肉付けされ、豊富化するための出発点となればよいと思います。

Ⅳ 研究会

① 国際情勢 ② 国内情勢 ③ 階級闘争・大衆闘争の三つについて研究会を、外部の同志をふくめて組織する。①については右堂同志、②については、こえの田宮同志の積極的参加をもとめるとともに、①、②とも経済関係の専門家の参加を必ずやるようにしたいと思います。

Ⅴ 以上は必要なことのうち思いつくままにいくつかの点をえらんだにすぎません。したがって政治方針草案のふくむべき内容を網羅的にのべたものではなく、あくまで部分的なものとして提出することを、お含みおき下さい。

以上

方針案作成とわれわれの態度

堺氏の批判への反批判

柴 田 三 郎

会報第四号に掲載されている堺新一氏の「組織統一準備委員会は遅滞なく政治方針・組織方針案を作成して公表すべきである」という論文を読んだ。準備委員会内部の実情や討論の内容、そこでの意見の違いが、かならずしも外部に正確に伝わらないのは、やむを得ないことで、その誤った、あるいは一面化されて伝えられた情報をもとにして、堺論文のようなものが書かれることも、今の場合、やむをえないとしておいてもよい。しかしこの論文は、「日本のこえ」七月十二号の第一面にそのまま転載されている。つまり日本共産党（日本のこえ）は、堺論文の主張だけでなく、準備委員会の過去四カ月にわたる活動状況にたいする評価をも含めて堺論文を支持したわけである。

いうまでもなく、各組織は準備委にたいして独立している。各組織がそれぞれの立場から、準備委の現状にたいして批判をもち、それを公表するのは自由である。しかし、日本のこえは、堺論文のようなものを転載して思わせぶりなポーズをとるのでなく、批判があるなら、自分自身の責任のある論文を発表すべきである。そして何よりも、準備委のなかで、具体的問題を提起し、強く自分の立場を主張すべきである。それをしないで、いわば仲良しムードのなかに準備委をおいておいて、裏で他人のフンドシまで使つて角力をとるというやり方は感心できない。

このことだけをまず一言しておいて、つぎに堺論文についての私の意見をのべよう。

「組織統一準備委員会は遅滞なく政治方針・組織方針（案）を作成して公表すべきである」という堺氏の主張に、結論的に私は賛成である。堺氏は、準備委員会のなかに、方針案の作成に反対の人間がいるということを前提にして論をすすめているが、堺氏の想像に反し、準備委員のなかでそのことに反対の人は一人もいない。それをはつきり確認したうえで、どうすれば速かに、しかも実践的に有効な方針を作ることができるかというところ

に、われわれにとつての現在の問題があるのだ、ということ強調したい。

われわれは、日共第八回大会以来、共産主義運動の分裂のなかで、貴重な体験を蓄積してきた。そのなかで、いまわれわれの手ばなすことのできない、もつとも重要な教訓は、綱領主義によつては共産主義運動の革新も、新しい党の建設もできない、ということである。それを今の問題にあてはめて考えれば、文字に書かれた「正しい」方針だけでは、けつして新しい党の建設などできない、ということである。代々木を乗りこえた真の前衛党を新しく建設してゆくためには、方針作成を含む党建設の過程そのものが、決定的に重要なのである。党内民主主義とか党活動の新しいスタイルとか大衆的前衛党の建設とか、すべてこういうわれわれの立脚点であり、生命であるところのものは、方針や規約によつて実現するのでなく、方針や規約の作成を含む党建設（この場合は結党）の全過程によつて決定されるのである。

だから、われわれ（統一準備委員会）は、広汎な討論と協力の組織ということ、堺氏のように、方針作成と切り離したり対立させたりして考えたことは一度もない。第三回統一準備委の決議「政治方針、組織方針作成の方法とその内容の問題について」に、このわれわれの立場は明確に確認されている。すなわち「共産主義者を結集するための組織活動が、政治方針・組織方針作成の基礎となることが重要であり、方針の作成と討議の過程そのものが、同時に結集、統一のための組織活動となることが必要である。」さらに、「政治方針・組織方針の作成をたんなる作文にとどめてはならないし、この仕事を通しておしすすめられる思想的・政治的等質化と同志的連帯の強化こそもつとも重要であり、この準備過程をすみやかに経過すること、われわれは不断に努力しなければならない。」と。

マルクス・レーニン主義とか、モスクワ宣言・声明の創造的發展とかいう言葉を、たんにタテマエとして掲げるのでなく、今日におけるその具体的内容を明らかにし、それをふまえてわれわれの方針案を作成してゆくという作業は、堺氏が考えられるほど単純かつ容易なものではない。さらに、方針案作成のためには、いくつかの基礎的前提になる理論問題の解決も必要である。「インテリの傍観主義」などという堺氏の言葉を讀むと、私など

は反射的に、方針案作成のためには、いま、われわれは一人でも多くのインテリゲンチヤの協力・参加を必要としているのだ、われわれの力量は、まだまだ小さいのだと叫びたくなる。

現在、準備委がおこなっている方針案作成の作業にたいする批判（われわれはそれを待ち望んでいる！）は、不確実な情報によつてではなく、第二回準備委員会決議を中心に、そこで提起されている問題への積極的な批判、提言として展開してもらいたい。たんに相互不信を挑発するにとどまるような言動はつつしもう。われわれの間には、冷静に討論し、解決してゆかなければならない問題が、たくさんにあるのだから。（一九六六・七・一七）

「反戦・平和斗争についての共産主義者の 共同行動推進のための会議」東京で開催

——平和運動の転換について活発に討議——

七月二十四日、東京で、井汲卓一、石堂清倫、大野昭之、栗原幸夫、中川昭善、野中進、前野良、吉川勇一の八氏を発起人として、「反戦・平和斗争についての共産主義者の共同行動推進のための会議」がひらかれた。さきに六月末の第四回準備委員会は、結集運動が、大衆斗争にたいする共産主義者の共同の方針のねりあげ、共同の行動の発展とむすびついて発展するために努力することを決議し、その一つとして七月中心に反戦平和運動についての共産主義者の共闘を組織する会議をひらくため努力することをきめたが、この会議は、その第一歩であつた。

会議には、こゑ、社革、統一有志会などの成員、労働運動、平和運動で活動している共産主義者が参集、吉川勇一氏の開会のあいさつのち、武藤一羊、天野次郎両氏の報告がおこなわれた。

武藤氏は、転換期にある平和運動と発展方向、共産主義者の課題について、総括的に問題を提起、天野氏は、ベトナム戦争の負傷兵のための米軍野戦病院設置反対運動の経験を基礎に、平和運動転換のための斗争における労働運動の問題を提起、この両報告を基礎に

討論が活発におこなわれた。

報告と討論のなかで、平和運動の転換を要求している中心問題として、ベトナム戦争の問題、転換をうながしている世界情勢の発展との関連、日本の平和運動の特殊性、それをささえてきた「日本の平和主義」の問題、反戦平和の運動における労働者階級の独自の任務、原水禁運動の問題、日本の平和運動の最良の伝統の継承と同時にその弱点と欠陥を克服するための課題、労働組合と階級政党の体質を根本的に変えるための課題、共産主義者問題とくにベトナム戦争反対斗争を発展させるための具体的方針について論議がおこなわれた。

この日の討論を深め、発展させ、平和運動の転換のための理論的、実践的方針についてさらに究明するとともに、実際の共同行動を発展させるための措置が、世話人会に委任され、この会議を第一回として、共同の研究討論と行動を継続的に発展させることを確認、この日の会議をおわつた。

投稿

代々木の転換とわれわれの立場

西 条 浩 一 (東京)

こゝ一、二カ月来急速に現われてきた代々木の路線転換、いわゆる「反ソ非中」の「自主、独立」はグリシン議長の代々木訪問を頂点にいろいろと現われてきた。その端的な例は日ソ協会などであろう。堀江巴一、長島又男氏ら反ソ活動の前線指揮官も党の決定でやつたのに、「彼等がゆきすぎたのだ」といわんばかりに主要ポストから棚上げして次の布石としたのを始め、ソ連船との交流を始めた支部もでてきた。

又、蔵原氏の中国批判演説等、多面的に現われつつあるが、未だ最終判断を下すには、流動中にみられている。この中で代々木の転換を「第二六全協」と結びつける話しもないずくともなく流れ始めた。風向きに敏感な先走りもでてきそうな動きもある。

代々木が日ソや原水協等の大衆運動で柔軟性をますこと自体は喜ばしいことである。左翼セクト主義から右翼日和見主義へのふり幅の危険は伴うが。

又理論面では反独占が強調され始め、宣言・声明の「革命的原則」もなしくずしにかえつつあるやにもみえる。

『政治方針が一致する ならば……』云々という意見も一部からはでてこよう。

「統一」と革新

代々木が四・一七のように労働者階級の利益を根本的に裏切ったことと声明を貫く総路線から背反することとは結びついていた。それは更に思想的にはスターリン批判と二〇回大会に始つた共産主義運動の革新をす通りした過程でもあつた。こゝ数年の党生活における党内民主主義の絶滅に裏づけられたこれら一連の「体系」は、代々木の体質にゆきわたつた病源の深さを示してきた。最近の手直しは国際共産主義運動における中国路線の完全なゆきつまりと孤立化、国内では日本帝国主義が新段階に入り歴史的な転期にたつた。従来の路線ではどうにも 現実に通うしない情勢と実践の有形無形の圧力によるものであ

ろう。

それは、選挙での票数、議席の増加、党員、機関紙誌の拡大にかかわらず、労働戦線を始めとした大衆運動の各分野での孤立化と分裂の固定化にはつきり示されている。

代々木の体質的な体系的な誤りを根本的なおすのは容易なことではない。政治方針の転換のみを他からきりはなして対処してはなるまい。こゝ一連の動きによつて我々との共通性があるようにみえても思想的な組織的な分析も合せた根本的な革新の方向が客観的に明らかにされず、特に党を健全化し欠陥を是正するのになくならない党内民主主義の具体的保証、今日の事態にいたつた正しい自己批判と各級幹部の責任のとり方がない以上、手直しは全く限定されたものであり、まして夜明けに近い党統一なんてものはなからう。

結集への前進を

労働運動やイデオロギー戦線等における体制内化への傾斜とそれをめぐる危機状況は、本来その先頭にたつて闘うべき共産主義者の分散、対立状況の止揚を求めている。

更に今日の代々木の転換は、良心的に苦悩してきた同志を始め内部の矛盾をおしすすめ、偽りで誤りの「自主・独立」を正しいものにかえることをテコに構造的変化を促す絶好の時機でもある。その為にも結集は新しい情勢の中で一層大たんにより早く、広く、おし進められるべきである。

が三月の全国会議で前進した結集への歩みは、その后一部に足ぶみ状態もみられる。

特に政治、経済、文化にわたつて決定的ともいえる重要さをもつ首都東京では三月以来、各派の正規の会合は一度も開かれていない。それにはそれなりに客観的、歴史的原因がある。がその上に立つて、指導部側の姿勢に大きな問題はないのか。各戦線でも苦悩する諸同志や進歩的大衆の声をまず卒直にきこうという態度に欠けてはいないだろうか。

ブルボン王朝的正統論にたつて賛成の者は来い式の態度がどこかにありはしないのか。

(9) 新しい前衛党のイメージ、政治、組織方針を早く発表する ことは賛成である。が運動の根本に古いものをくつつけて自己脱皮がさけられ、広汎な各戦線のエネルギーの結集の努力とときり離されたやり方では、よしんばよりよい方針がでも、代々木は勿論、結集派幹部を

ふくめたある種の不信感が未だ根深い状況で人々の心をゆり動かすことはできない。

又、結集のもつ弱点に反発する余り、過度の警戒の強い結集反対派の存在も事態の前進に否定面となつてゐる。

反対するのみが唯一の政治的存在理由といわれてもしょうがない層とは別に、運動への情熱と行動をもつ人々の一部に、裏返された「幹部依存」がありはしないだろうか。

「国際権威主義」、「官僚主義」的側面に強いき憂¹、反対する余り、幹部の動向、言動ですべてをみるやり方の一部に、「こゝ以上の正統派意識が強い」「構造改革の教条主義だ」等の批判が善意の人々に与えられていることを、再度考えなおしてほしい。

革命は党がやるものではなく、何千万の人民がやるのと同じく、革命運動と日本の共産主義運動の再生と革新は、幹部は大事であり影響力も大きいが幹部がやるのではない。革命を求める労働者、大衆に支えられた我々党員と活動家である。という極めて平凡ではあるが、大事なことをお互に自覚して、結集を実りあるものとする為に、前進しようではないか。